

博物館だより

| 葛飾区郷土と天文の博物館 | Katsushika City Museum

No.

1 0 2

江戸小紋を伝える

小宮家のわざと人

現在、特別企画展示室で開催中の「江戸小紋を伝える小宮家のわざとひと」。日本の伝統的染色技法である「江戸小紋」の第一人者である小宮康孝氏・康正氏が守り続ける小宮家の技術と、その伝承の過程に焦点をあてた展覧会だ。（本写真真撮影 伊藤千恵）



小宮康助 作
「毛萬筋」



小宮康助

1882年、請地（現墨田区向島）に生まれる。小宮家の

Pick up!

江戸小紋を伝える
小宮家の3代の職人たち

江戸小紋の祖。浅草の浅野茂十郎のもとで小紋を学び、のちに化学染料による新しい型染技術で小紋の大衆化に貢献したことでも知られる。自身の染色技術の研究・伝承に加え、型紙職人の育成、地位向上にも尽力した。1958年、江戸小紋で人間国宝に認定。



小宮康孝

1925生まれ。父康助の下で修行し、江戸小紋技術を

受け継ぐ。父と同じく型紙職人を重んじ、型染の技術を守り伝えるために、型紙の材料となる和紙の研究開発を行った。また型染に適した絹布の開発にも努め、現在も伝統技術の伝承に力を注いでいる。1978年、江戸小紋で人間国宝に認定。



型紙彫刻師 喜田寅藏
(1894-1977年)
伊勢型紙彫刻師の名人中の名人。
小宮康助氏は喜田氏の型紙で数々の傑作を生み出した。

本展を企画した学芸員の堀充宏は「美しい江戸小紋の裏側には、頑なな伝統技法の伝承と柔軟な先進技術による革新、そしてそれを支える多くの職人の技が隠れています」と語る。本展は、美しい江戸小紋の作品もさることながら、その技術はどのような人たちに支えられ伝えられてきたのか、そこに注目しているのが大きな特徴と言えるだろう。小宮家の江戸小紋は非常に有名であり、その作品は雑誌やテレビや展覧会など数々のメディアで紹介されてきた一方で、その技術の発展や代々伝承されていく過程について紹介されることは多くなかったからだ。



江戸小紋の型紙に使用される和紙。繊維が縦横に絡み合う小宮家特製の和紙は型紙彫刻に最適なのだという。

小紋を摺る絹布を作る職人……。小宮家の代々の職人は、伝統の技術を守り、時には最新技術を応用して発展させ、そして次代へと技を伝えるなかで、そのような周囲の職人たちを非常に大切にしてきたという。職人同士の関係の中に技術と伝承の秘密が隠されているのではないというのが本展の要諦だ。本展では初代小宮康助氏の初期の代表作「毛萬筋」をはじめ、小宮家代々の職人の代



喜田寅藏 作
「互抜十かすり」(型紙/部分)



小宮康正

1956年生まれ。父康孝の下で修業を積み、伝統的な染色

技法の継承や復元に努める。同時に、現代の社会環境の中で伝統技術を伝えるべく、養蚕や防染糊の研究開発を行うなど、江戸小紋のみならず、その周辺技術の保存や発展にも尽力している。日本伝統工芸展高松宮記念賞をはじめ受賞多数。2010年に紫綬褒章を受賞。



小宮家の和紙を漉く和紙職人、鹿野嶺三氏。那須橋を原料とした型紙用の和紙は、開発に挑んだ小宮康孝氏と和紙職人の熱意の結晶である。江戸小紋は、数多くの職人によって支えられているのだ。



江戸小紋の伝統を守るためには、質の良い絹布が不可欠だ。小宮康正氏は養蚕農家と連携し絹糸の開発にも関わっている。

表作が一堂に会すほか、稀代の名型紙彫刻師喜田寅藏の型紙や作業道具類も展示される。さらに型染めの作業工程の再現、現在の江戸小紋を支える様々な職人の功績の紹介など、盛りだくさんの内容だ。是非この機会にご覧いただきたい。

Information

葛飾区郷土と天文の博物館

開館20周年記念展

「江戸小紋を伝える 小宮家のわざと人」

会期：10月8日(土)～12月4日(日)



——宇宙を知ってワクワクすること。
その経験や感動を提供したいんです。

新井 達之（葛飾区郷土と天文の博物館 学芸員）

あらい・たつゆき

1964 年生まれ。千葉大学理学部卒業。
小学3年生からプラネタリウムに通いはじめ、中学、高校では天文部に所属。大学時代には公立のプラネタリウムのボランティアとして、プラネタリウムの解説、番組の企画・制作に携わる。大学卒業後は一般企業に勤めるも、プラネタリウムとの縁もあり平成2年より現職。以降、現在まで当館の天文分野における展示・プラネタリウム事業の企画、制作、運営を行う。デジタル・プラネタリウムの草創期からその可能性に注目し、デジタルユニバースの日本初導入も果たした。天文学の「今」を紹介すべく、高度なプラネタリウムに技術を駆使して、解説者と観客が一体となる番組作りに取り組んでいる。

葛飾区に世界最新鋭、 こだわりのプラネタリウムがあることを知っていますか？

今年開館20周年を迎えた葛飾区郷土と天文の博物館。郷土資料や天文学の展示とともに、プラネタリウムは博物館の看板のひとつだ。番組はすべてオリジナル制作、録音のナレーションは使わず全編スタッフの生解説、最新鋭のデジタルプラネタリウムの導入……。他のプラネタリウムでは容易に実現できない姿勢を貫く、その根底には強い情熱が感じられる。当館プラネタリウムの仕掛け人である学芸員、新井達之が語る20年間のポリシー、そしてこれからのビジョンとは――。

葛飾に博物館ができた

1980年頃、葛飾区には郷土文化の資料保存や学習、文化財普及啓発のための郷土資料館を作る構想がありました。実はそれと同時に、葛飾区内の学校からプラネタリウムが欲しいという要望もあつたんですね。当時は理科の天文の授業で渋谷のプラネタリウムに生徒を連れていったのですが、渋谷まで行くとい日潰れちゃうんですね。だから葛飾にもプラネタリウムを作って学校教育に使用したいという希望があつたんです。この二つの構想を合体したのが郷土と天文の博物館です。

つまり最初にプラネタリウム構想があつて、これが郷土博物館と合体する時に、博物館のなかに天文学部門が作られ、プラネタリウムはその天文部門が運営する、という位置づけになったわけです。これは二つの意味で幸運なことでした。一つは専門的なスタッフを揃えられるということ。そしてもう一つは葛飾のプラネタリウムの目指すべき方向が明確になったことなんです。

専門のスタッフ

ひとつずつ順に説明しましょう。まずは専門のスタッフについて。つまり、区立博物館となつたことで天文学専属の学芸員が直接プラネタリウムを運営できるようになつたということです。区立博物館ですから、郷土部門で資料の管理収集にあたる学芸員が必要なのに、天文分野とプラネタリウムにも天文学芸員や専門職員をおいてしっかりやりましよう、ということになったんですね。

葛飾では直接専門のスタッフが運営すること、プラネタリウムに何が求められているのか十分に検討し、番組の制作や上映に専念して、先進的で良質なプラネタリウムを提供できる環境を整えることができました。学芸員を中心に、高度な知識と技術を持った専門スタッフが丸となってチームを作り、独自の番組制作に取り組んでいます。

「博物館のプラネタリウム」として

もう一つの幸運は、天文学の博物館のプラネタリウムになつたこと。つまり天文学を扱う博物館として、少しでも多くの人が「宇宙や天文学に興味を持つキッカケとなるプラネタリウム」というコンセプトがはつきりした、ということです。

ですから、プラネタリウムで扱う題材は必

ず天文学です。「それってプラネタリウムだから当たり前」と思うかもしれませんが、アニメやマンガのキャラクターを中心にしたてきあいの番組を上映しているプラネタリウムは結構沢山あるんです。当館ではそんな番組は絶対に上映しません。

普通、美術館や博物館の学芸員は調査や研究をして紹介すべきトピックを見つけ出し、展示を企画しますね。それと同じように、天文の学芸員や専門職員が天文学の新発見や話題に基づいて番組を企画・制作し、そして上映するという姿勢が当館の基本なんです。もちろん、これは専門のスタッフが揃う当館だからできること。この方向性へのこだわりが、当館20年の歴史と言っても良いと思います。

当館の特徴として生解説も挙げられると思いますが、これもこのこだわりのゆえに行つて来たことなんです。つまりプラネタリウムの上映も、学芸員が企画展の解説をするのと同じく、全編とおして生で語るべきだ、というわけです。見に来て下さるお客様も毎回変わりますから、お客様と同じドームの中にいるスタッフがその場の雰囲気に合わせて語ることで、これに勝る臨場感はありませんし、このような体験を通して初めて宇宙への興味や感動を共有できるのではないのでしょうか。20年間は決して短い時間ではありませんでした。が、プラネタリウムについての考え方はずっと一貫しているんですよ。

デジタルプラネタリウム

20年間変わらないこだわりのありますが、一方でプラネタリウムの設備は2007年に最新鋭のデジタルプラネタリウムを導入し、大きな変貌を遂げました。もちろんただ新しい機器に飛びついたのではありません。「天文の博物館のプラネタリウム」にとって、大きな役割を果たすと考えたからなんです。

2006年までは光学式のプラネタリウムを使つていました。当時の天文学紹介の表現手段は、プラネタリウムの星空以外にスライドとビデオ、レーザーしか無かつたんです。それに対して1998年頃に新しく出始めたデジタルプラネタリウムは、ドーム内に自由自在に映像を映し出せます。表現の幅が格段に広がるんですね。最初は機能的にも単純なものでしたが2002年頃に実際の運用にも耐えられそうなものが出来始め、私も海外の動向を追いかけ始めました。

そして2004年に当時開発中だったデジタルユニバースに出会うことになつたんで

す。デジタルユニバースというのは、銀河系の中のさまざまな天体や銀河系の外にある銀河の群れ、137億光年彼方からやってくる電波など、全宇宙の膨大な天体のデータをひとまとめにしたもの、全宇宙の三次元地図のようなものです^[1]。

これをデジタルプラネタリウムの仕組みの上で動作させると、地上からの星空だけでなく、宇宙の任意の場所の星空、つまり宇宙空間そのものをドームの中に再現することができると。これは「天文の博物館のプラネタリウム」を目指す当館にとってびつたりだと思いました。

天文学の資料でモノというのはほとんどありません。研究対象は宇宙ですから、隕石を除いては絶対に手に取れないものです。では「天文学の資料」とは何か。それは世界の色々な研究機関が観測したデータなんです。デジタルユニバースにはそのデータが詰まっています。資料としてそのデータを扱える、そして分かりやすくドームに映しだせるわけです。これはとても天文の博物館的ではないでしょうが。

天文学の世界も日々進歩しています。今日その守備範囲は宇宙の全範囲まで広がっています。それは、今までの地上からの星空を写すプラネタリウムでは表現できない世界ですよ。当館は、今の宇宙、今の天文学の世界を伝えたいのですから、もし導入できる機会があれば、こういうものを組み込みたいなと思つていました。

2006年にプラネタリウムをリニューアルすることが決まり、光学式に加えてデジタルプラネタリウムが盛り込まれることになりました。ただし、この時点ではまだデジタルユニバースはリリースされていませんでした。ところが同年7月にメルボルンで国際プラネタリウム協会の大회가開かれて「もしかしたらデジタルユニバースがリリースされるのでは」という予感がしました。思い切つて現地に行くと、見事にその予想は当たつたんです。実際に操作したり開発者の話を聞きながら「これはいけるぞ」と確信しました。それで2007年3月にデジタルユニバースを組み込んだデジタルプラネタリウムを日本初で導入ということになったわけです^[2]。

導入後、すぐに「かつしかから宇宙へ」という番組を作りしました。これは20年前から作リたかった番組です。郷土博物館としての「葛飾」という場所から視野を広げていくと、そこは宇宙なんだという番組を作れたかつたんです。それがデジタルユニバースでようやく

く作れるようになったんです。常設展示のようなプラネタリウム番組にしたいと思いながら制作して、今ではすっかり看板となる番組の一つになりました。

20周年記念番組「宇宙創世」

秋からは開館20周年記念の新番組がスタートします。テーマは宇宙創世^[3]。これは「かつしかから宇宙へ」の対になる番組として構想したものです。「かつしかから宇宙へ」は宇宙について空間という側面から捉えたものですが、今度は時間という側面から宇宙をみていこう、137億年の宇宙の歴史を表現しようという番組です。

実は、プラネタリウムで時間を表現するのはとても難しいことです。プラネタリウム自体がそもそも空間を表現するものとして作られていますから。それをどう上手に使つて時間を表現していくか、当館にとっても大きなチャレンジです。そのあたりを注目してもらえると嬉しいですね。

番組の流れとしては、大きく分けて4部構成です。宇宙の誕生から始まって、星や銀河の誕生、そして地球・太陽系の誕生、最後に生命の誕生の4つのトピックを、クラシックの名曲に合わせてドーム全体に表現したいと考えています。音楽もこの番組のためにのつておきの名曲を使う予定なので、音楽も楽しみにして頂ければと思います。

葛飾らしいプラネタリウム

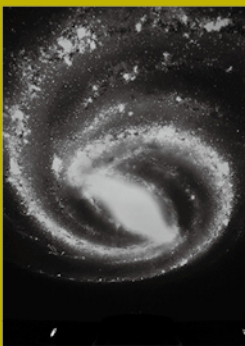
これからも、やはり「天文の博物館のプラネタリウム」としての筋を通すこと、番組をみることで発見や感動ができるようなプラネタリウムであり続けたいですね。目指すのは、ただ「知識を得ました」「癒されました」で終わるプラネタリウムではありません。宇宙を知ってワクワクすること。その経験や感動を提供したいんです。

逆に言えば、そのためには新しい発想や機材なども積極的に取り入れていく柔軟さも無くないようにしたいと思つています。20年頑固に筋を通し続けてきて、やっと当館のカラーが出てきたと思います。「天文の博物館のプラネタリウム」にこだわつたからこそ、当館らしさが出てきたのではないのでしょうか。今後も私たちがらしいやり方で「葛飾のプラネタリウムだ」って分かつてもらえるような番組を作り続けたいですね。

（談・2011年8月24日）



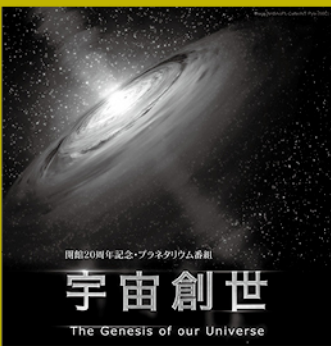
[1] プラネタリウムの番組は、天文部門のスタッフが全編生解説。同じ番組でも解説の仕方はさまざま。毎回工夫をこらした解説でお楽しみ頂いています。



[2] デジタルユニバースはアメリカ自然史博物館がNASAの協力のもと制作した全宇宙の三次元地図データ。デジタルプラネタリウムに組み込むことで、太陽系から彼方の背景放射（宇宙誕生直後の名残の電波）まで、さまざまな天体データを表示できます。



[3] デジタルユニバースは当館が日本で初めて導入。その後バージョンアップも行い、現在も最新鋭の設備を誇ります。さらに当館オリジナルのデータも搭載しています。



[4] 開館20周年記念番組「宇宙創世」は、10月1日（土）～12月25日（日）まで上映中。是非ご覧ください。

葛飾区郷土と天文の博物館ご利用案内

開館時間	午前9時～午後5時 (金・土曜日は午後9時まで開館。ただし金・土曜日が祝日の場合、午後5時に閉館。入館は閉館の30分前まで)
休館日	月曜日、第2・4火曜日 (月曜祝日は開館。火曜祝日は開館し翌日休館)
入館料	大人 100円 小・中学生 50円 小学生未満無料 (毎週土曜日は中学生以下無料。20人以上の団体は2割引)
プラネタリウム観覧料	大人 350円 小・中学生 100円 小学生未満 50円 (毎週土曜日は中学生以下無料。20人以上の団体は2割引)
年間パスポート	大人 2000円 中学生以下 700円 購入から1年間、入館とプラネタリウムが見放題になる大変お得なパスポートです。購入時にご希望があれば、当館からのおたよりを1年間お送りします。

博物館だより

発行日	2011年11月1日
発行	葛飾区郷土と天文の博物館 〒125 - 0063 東京都葛飾区白鳥3 - 25 - 1 電話 : 03 - 3838 - 1101 FAX : 03 - 5680 - 0849 Web : http://www.museum.city.katsushika.lg.jp/